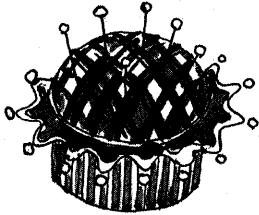


家庭科男女共修について



池戸 允子

この問題は、日本が国連の男女差別撤廃条約に批准したことに端を発していると聞いている。

高校の現行教科の中で唯一家庭科のみが男女差別のある教科であるといわれる。少なくともこの条約が批准されたときには、家庭科が男性にも開放されている高校はほとんどなかったのではないかと思われる。

そこで考えられる問題点がいくつかある。

第一に、日本の教育改革には、得てして自分達の内部からわき上がって来た改革ではなくて、なんらかの外部的な力によってそれがなされているということである。

第二に、男女差別の問題はこの日本社会に根強く現存している男尊女卑の傾向を抜きにしては考えられないということがある。

第三に、一般の人々が家庭科をどのように捉え、家庭科の男女必修をどのように考えるか。

「1」教育の改革について

私は、私自身の中学・高校生活を顧みたいと思う。私が女学校一年のとき第二次世界大戦は終結し、日本は敗戦の混乱の中にあつた。

間もなく現在の六・三・三・四の教育システムが実施されて、私たちの学校も女学校から共学の高校へと移行されていった。アメリカの占領下にあつて、一九四五年八月一日を境に、急転直下民主主義の教育がなされるようになった。教育にかかわる理念の一八〇度の転換を経験したのである。

その日から明らかに教師達にも混乱があつた。ある新進気鋭の教師は言つた。「今や民主主義教育をする時代になった。勉強するのは君達だ。教師はそれを補助すればいいのだそうだ。僕はここに座っている。質問があつたら何でも聞きに来たまえ」彼は、教室の片隅に腰掛けて本を読んでいた。また別の教師は、玉串をもつて教室にやってきた。彼は大まじめで言つた。「天皇は現人神だ。その考えに反対するもののために御祓いをする」生

徒はみんな黙つていた。しかし、大半の教師たちは「私は前々から民主主義的な考えを持っていたが、圧力が強くて軍国主義教育に従うよりほかになかったのだ」と述べた。

私は、中学高校時代の教師の生徒に及ぼす影響は意外に大きいと思つている。この過渡期にあつて、揺れ動く教師の真実に触れた時、かえつて冷静に事態を判断しようという気持ちになつたのである。手の裏を返すように軍国主義から民主主義へと乗り換えた人よりその変化の中でとまどう教師に好感さえ持つたのである。その中で真実に生きることの意味を知つたように思う。

中学三年の時こんなことがあつた。多くの友達を特攻隊や戦争で失つたひとりの教師が、生徒たちに「人生とは」と題する作文を書かせた。私は「生きる喜び」という題で書いたところ、朱筆で「人生に本当の喜びがあるのでしようか」と書いて返してくれたその日、厳寒の夜、焼酎に青酸カリを入れて飲み、二四歳の青年教師はその命を自ら絶つた。つぎの日講堂に集まつた生徒達

は、校長と教師たちが彼の自殺の動機について入れ替わり立ちかわり講壇で議論するのじつと聞き入っていた。生徒たちの前で真っ向から校長と対立した若い教師は、その後もずっと私たちの学校で教鞭を取り続けた。

私が高校生になった時、家庭科は、選択となり、家庭科を全く選択しない女子生徒もあり、また男子生徒の比率が増加するにつれて、実際に授業を持ってない家庭科の教師が何人も出来てしまった。そんな折、私は、高一高二と被服を選択したが、妹は家庭科は選択せず、理科系の学科を選んだ。教師から妹に家庭科を選択することを勧めよう言われたが、妹は、「する気になれば、いつでも出来るから」とそれを拒否した。彼女は、食物・被服はもちろんのこと、家庭経営に関しても多くの事を母から学んだと思うのである。現在は、家計簿はいうに及ばず、栄養家計簿までつけている堅実な主婦である。その後まもなく家庭一般が女子の必修となった。私がこのような過去の変遷を思い起こしたのは、今回の改革も高校生の内側からの必然の要求として起こった

ものではないと思うからである。新しい事が始められる時は、必ず動揺があり、試行錯誤の段階があり、行きつ戻りつしながら前進していくのである。

〔2〕家庭科の教育内容について

ある日の会話から

教師 「平成六年度の入学生から家庭科が必修にな

るんだよ」

高一男・A 「ああよかった。ぼくたちは、家庭科やらな

いですんで」

「おれ、裁縫なんか、ぜんぜんやる気ないも

んなあ」

高一男・B 「ぼくだって、ラーメンくらいならできる

よ」

「でも縫うのなんかいやだな」

中二女・C 「えー、男といっしょに裁縫するの」

この短い会話のうちに多くの事が秘められている。社

会一般の常識は、家庭科というと被服と食物を勉強する
と考えて、女が家庭に入って必要とする事を教える教科
と思ひ込んでゐる。

家庭科の教師は誰もが、裁縫と料理は得意だと判断さ
れる。

家庭科の男女共修と聞くと「男も裁縫するの?」と跳
ね返ってくる。勿論、現行の「家庭一般」の教科書は、
家庭経営、保育、住居、被服、食物が主な項目となつて
はいるが、よく理解されていないのが現実であろう。

私は、公立高校で非常勤の家庭科教師をしている。私
が担当し、保育を教えている生徒は、今、人形劇をもつ
て保育園を訪ねようとしている。新聞紙、古いはがき、
有り合わせの布地や毛糸、ポスターカラー、ラッカーと
いった材料で人形造りに取り組んでいる。ストーリーも
自分たちで考え、シナリオも作った。三匹の子豚のよう
によく知られたもの、動物を主人公にした創作童話、J
リーグの人氣ものアルシンドを主役にしたものなどさま

ざまであるが、共通してみられることは、何かを幼児に
教えようという上から下への縦の方向づけが無意識のう
ちにされている。その発想の原点に彼ら自身が受けてき
た幼児教育があると思われる。好き嫌いはなおさねばな
らない、お買物の手伝いをする良い子はお金の計算を通
じて算数の勉強も出来るといったものである。

現実に幼児と接触のない高校生たちは、自分たちの幼
児期の経験を参考にする以外に方法がないのであろう。
幼児自身の発達の課題や興味、必要よりも、大人が決め
た「幼児はこうあるべきだ」という枠の中に当てはめよ
うとしている。このことをとおして彼らが受けてきた幼
児教育の実態をかいま見たような気がした。この人形劇
が完成して実際に幼児と過ごす経験を経てから生徒たち
と幼児について学びたいのである。

家庭生活における実技の修得は、本来、それぞれの家
庭にあって当然のように行われてきたが、核家族化及
び、家事労働の社会化、家事の合理化の急速な進行、既

婚女子の就労率の急激な上昇などにより家庭の機能は、その内容を変化せざるを得ない状態になっている。ミシンやアイロンはおろかフライパン、まな板さえない家庭があることも現実である。

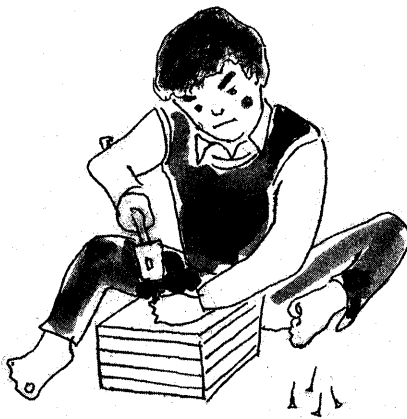
ある大学の教授は、「家庭で教えられなくなった今は、学校で教えるより方法がない」と語った。

教育の画一化・家庭生活の画一化から、興味ある社会は生まれては来ないのではないだろうか。

私は、大学時代には被服の実技や調理実習などを学ぶチャンスは全くなかった。しかし、高校生時代には、着ていく制服は自分で作らなければならなかったことや、被服を選択したことで洋裁や和裁を学んだこと、また家庭において、少ない材料でポリウラムのある料理を工夫する楽しさ、古い衣服をいかにきれいに仕立て直すかをあれこれ考えて、挑戦したことは、楽しい思い出になっている。

私は今、十五歳の男子と女子に家庭科を教えようとし

ている。私の教えようとしているクラスの男子と女子の比率は断然男子が多く、あるクラスは男子のみである。彼らのうち本当に家庭科を勉強したいと思っているもの



は、皆無か、あつても極く少数であろう。ではどのようにして生徒たちの興味を引き出したら良いのか、いかに楽しい授業をするかが、私に課せられたテーマである。

昨年一年間男子学生の家庭一般の被服を一クラス、高校三年の食物選択を一クラス受け持った。家庭一般の被服のクラスは高校一年の男子一四人、女子一人のクラスである。隔週に二時間の授業でエプロンを製作することになった。エプロンを一年で製作し二年でそのエプロンにかけて調理実習をしようという考えであつた。

まず手順を述べると、①型紙はL、M、Sの三つのサイズを教師が製作し、各自が自分に適したサイズを選び自分の型紙を作る。②どのような布地がエプロンに適するか、どのくらい必要かを知り布地を用意する。③ミシンについて勉強する。④布地を裁つ ⑤縫い方を説明し ⑥製作をする。

ここで女子生徒にはなかつた用語についての質問がいくつあつた。(イ) (型紙や布地を) 裁つ、 (ロ) わにす

る (イ) み、み (ニ) 縫代、など、これらの言葉を初めて聞いた生徒がほとんどだつた。またミシンを初めて使う生徒や、扱い方を知らないものが多かつた。

実際に製作に取りかかると、それぞれの能力、手先の器用さ、経験、未知のものに挑戦しようという気力などに明確な個人差がみられた。それと共に、彼らを取り巻く環境の乏しさを痛感した。ミシンのない家庭が多く、針箱さえないのではないかと思われるものもある。例えばミシンがあつたとしても、それは押し入れて埃をかぶつていて、ミシンを使っている母親や家族を見たことがないのである。

エプロンを製作することが適切か否かは、さておき、授業中、個人指導をすることによって個々の生徒とのコミュニケーションを図ることができ、生徒をより良く理解する機会となつたのも事実である。比較的早く完成した生徒は、「ミシンが古くて縫いにくかつたが結構楽しかつた」また「縫うことは面倒だつたが、おもしろかつた」と、感想を述べている。今まで、女子は細かいこと

が得意であり、男子は機械に強いといった先入観があったが、実際は、性差ではなく個人差だということを実感したのである。

特に、複合学科である家庭科の性質からしても、生徒たちの育ったそれぞれの家庭や環境の影響は大きいように思われる。

食生活にかかわる問題として、ある高校の野球部の顧問の教師から「野球部員の普段の食事が非常に貧しい。カップラーメン一個、菓子パン二個など手軽に売店で買えるようなものですましてしまう。母親は弁当を作らない。これでは体力がつかないから負けてしまうのは当然である」と聞いた。

飽食の時代といわれているにもかかわらず栄養に片寄りがみられる実態を知れば、調理ばかりでなく、しっかりと栄養に関する知識を得ることは、必要欠くべからざることである。

「3」家庭科男女共修へのニーズ

このように考えてくると、将来新しい家庭を形成するであろう若い男女が、共に家庭科を学ぶことは深い意義がある。現行の民法では、夫婦は平等であり、共に家庭の担い手である。夫婦は物心両面から支え合い、励まし合って家庭を形成していくのである。

これは、あくまでも明確な男女平等の立場にたっていることである。しかし現実には、男女差別は日本の社会に根強く、衣食また乳幼児の世話などは多くの場合女性の仕事と考えられている。たとえば、育児休暇制度を利用する男性が、はたしてどのくらいあるだろうか。たとえ本人が望んでも社会はそれを受け入れないのではないか。男子の高校生に聞いても、ほとんど不可能に近いという答えがかえってくる。特に地方においては、まだ昔の「家」の思想がしっかりと根付いて「長男だから嫁をとる」「うちの嫁は云々」といった言葉が耳に飛び込んでくる。一方、知人のアメリカ人に聞くと、男性が育児休暇を取るとは普通の事で何の問題もない。彼らは

大手を振って育児休暇をとりまた会社に戻ることが出来るということである。

これからの時代をになう人々に期待されることは、地球的視野に立って、自分の家庭生活及び社会生活を築いていくことに自ら責任を負うことであり、食品公害、水質汚染、農業による汚染、食品添加物の問題など、様々な、人の生活にかかわる問題を、男女の別なく積極的に家庭科において取り組んでいくことである。

家庭科の男女共修の実施は、新しい時代の幕開けになると言っても良いのではないか。

男女差別撤廃条約批准ということから出発した家庭科の男女共修であるが、これを機会に家庭科が、人間そのものを学習する機会となるならば、すばらしいことである。それは、彼らの現在の生活、すなわち高校生活をより充実したものにしていくのではなからうか。

これは私の全く個人的な考えだが、将来「家庭科」は「人間学科」といった名称のもとに人間が所属する基本的な集団として家庭を物心両面から捉え、人間の基本的

な問題や生活の知識を学び、実生活に生かしていく学科と考えられねばならないと思う。

山梨県立山梨園芸高校
“ “ 峡北農業高校
“ “ 峡北高校

